海とチョコレート

黒野　ている

青の世界

優しくチョコレートが溶ける時が好きだった。

魔法にかけられ漆黒のガラスに姿を変えたそれに出会うために、冷凍庫を開ける。
首筋をつたう冷たい魔女の吐息の目眩ましなどに誤魔化されるものか。
小気味良い音
ぼくの指のあいだ
２つ３つと分身する黒いガラス。

マッチ売りの少女が炎の中に描いたように、ひとかけら口に含むたびに拡がる夢。
ひとつめの夢は春の兆しを知らせる薄明りのように
ふたつめの夢は燃え盛る氷の太陽のように
みっつめは豊穣の実りのように
そして繰り返す季節を封じ込める氷柱のように…冷たく鋭い欠片(かけら)は舌を貫こうとしながらも瞬間に猫の甘噛みとなって姿を消す。

実体のない奴だ。指先を濡らして、それはゆるり、と落ちようとしている。
そうだ　どこまでも落ちて影となり暗闇となり、夜の海のようにぼくを包むのだろう。
重みのあるチョコレートの海だ。

いくつかの冷たい夢は瞬く間に消えてしまった。
でもぼくは一夜のうちにすべてを失うようなことはしない。
またちがう日の夢に逢えるように、チョコレートを扉の向こうの墓標に眠らせる。

……そこまで書いて、ノートを開いたまま目をつむる。

ぼくはいくつもの罠に架けるように 自分を愛してきた。

どこまでの痛みに、どれほどの暑さまで、どれくらいの辛さまで耐えられるのか。自分自身を量り、持ちうる力を知りたかった。 どんな奴の、どんな罠に嵌ろうとも負けない自分になりたかった。
修行でもするかのように、自分にはときに厳しく、ときに冷たく、それに打ち勝ったときに感じるほんのわずかな成長とはかないほどの慈愛を糧とした。

青のカーテンに遮られた太陽が海の底の模様を映し出したようなぼくの部屋。
深い深い海に潜り、長い間そおっと息を吐き続けながら海底の石を拾いに行く、そんなひとときにぼくの世界は花開くのだ。

　気を一点に集める
　すべての分子が整い
　ひとつの線となり
　壁となり
　塊となった
　雑音はやみ
　真空のなかにぼくはいた
　上下左右の間隔もない
　宙に浮いたまま

それから　ゆっくりと身体が回転するような感覚に陥る。
傾きだすヒヤリとした瞬間が何かに似ていて、未だに思い出せな

　　佐和ちゃん

清冽な分子の流れが乱れ、沈みかけたぼくは中途半端な姿で浮上する。
もう一度、同じ音が分子を崩した。

「いるの？」

ぼくのドアを軽く開けて、母さんの声が入ってくる。
まるで目を覚ましたばかりの猫になりきってぼくは顔を上げる。

毎年夏休みには母の実家へ行くのだが、今年は急に用事が入ったのだという。一緒に行くはずの

姉も同じタイミングで都合が悪くなったらしい。
「だから今年は行くのやめようと思うの。」
いつも楽しみにしてるのにごめんね、と続く。

母の実家はなにもない田舎なのだが、じつは美味しいものがたくさんあるのだ。ぼくたちのために気を利かせて揃えてくれるのだろう、ぼくにもそれが楽しみのひとつであった。

「届けたいものがあったんだけど、またいつかの連休にするわ。佐和ちゃんもその時一緒に行こう。」

もちあげた頭をぼくは無言のまま すとんと枕に落とす。
母はそれを承諾の合図とみたのだろう。ドアの閉まる音が響いた。

そんなに大きく期待していたわけでもない。

ふうん

1週間ほどぽっかりとあいた穴。埋めるのにわけはない、いつものようにゆるゆると時を流せばいい。
そのとき、あの緑のなかに自分ひとり浮かんでいる風景が浮かんだ。
いつもの青い海底ではない、光り輝くような緑だ。

「母さん」

と、ぼくは呼んだ。

ひとりのせかい

はじめてひとりで電車に乗り込んだ。
線路が、通り過ぎる普段の生活を針のように縫っていく。

持たされた菓子折をそっと足元に置くと、ビルの間からやっと勢いを増した朝日がぼくの目に刺さる。
ここから2時間の特急、バスに乗り換えて30分ほどの旅程だ。
出がけに朝食の入った袋を押し付けられたが、いつ食欲が出るかはわからない。
目を閉じて電車の揺れに身を任せ、またあの緑のなかにぼくを浮かばせてみる。

まばゆさの奥にたちひそむ深い陰影、鮮やかな木々のざわめき、気配を消して佇む魚たち、春には春の、夏には夏の歌をうたう鳥たち。そこに乾いたゴロ石の熱気と流れの上を吹く風が織り混ざり、ぼくのかたちをなぞってゆく。
小さい頃から何度も何度も見た景色。いつも必ず母か姉がいたはずだ。でも今日はぼくがひとりでそのなかに立つ。

魔法使いの仕業で ぼくはここにいるんだ。
両足で立っているはずなのに、片足が空中に取り残されている。空(くう)を蹴る足の裏はひやりと縮み上がる。冷たい渓流についたわけでもないのにだ。季節はずれの枯葉が音もなく降り、キラキラと陰りのなかに消えてゆく。

静かな水面に輪が広がる。
訳知り顔の魚がぱくりと呼吸して奥底へ走る。よく見ると、水の表面にはカゲロウが絶え間なく昇華していた。ハッチ（羽化）のひとときだ。さっきからキラキラしていたのは落ち葉などではなく羽根の輝きだったのだろう。
木漏れ日のライトの中を通る時だけ、カゲロウは存在を表すのだった。

夕方の日暮れどきのハッチは幻想的で、川にかかる小さな橋の上におびただしい妖精たちが集まり踊る。
母や姉が帰りをせかすのにも構わず、岩場が黒く見えなくなるまで、ぼくはハッチを見つめていた。
カゲロウはぼくがいなくなってからも、暗闇でほの白く舞い続けているのだろう。
白く白く揺れあがり、灰色に燃え尽きて音もなく積み重なる。

ぼくの記憶にある、夏の残骸の景色。 ぼくの夏はそこで死ぬのだ。

アナウンスが次の駅を告げ、いつの間にか停車していた列車が、ゆっくりと動き出す。
ぼくはアンドロイドのような無機質な動きで紙袋からサンドイッチを引きずり出した。今日からしばらくは口にしないであろう、ぼくの家の味だ。

輪郭ーりんかくー

電車を降りると、ぼくの知っているのよりもいくぶんか古びたバスが待っていた。

短い時間だったのに、このバスは色濃くぼくの記憶に残っている。オイルステインのしみ込んだ木の床、褪せたシートカバー、革製の吊り手。ぼくの好きな「知らない懐かしさ」でいっぱいだ。
一人では開け閉めできない、重たい窓。何度も通ったはずなのに見覚えのない街並みを過ぎると、バスの行く先にはは青い田んぼが広がっていた。
乗り降りする人は少なくなり、停留所を通り過ぎることが多い。ぼくは停留所で降りられるか、心細くなる。
ようやく目印の雑貨屋を見つけ、降車ボタンを押した。今までは母が払ってくれた料金箱に、コインを入れる。

久しぶりに踏む土の感触。ここからは足が道を覚えている。
あぜ道に逃げるバッタや水路のなかのカエル、いつもと変わらない風の匂い。
ふと電車のなかで思っていた景色が映し出される。家へ寄るより先に、あの場所へ行ってみたくなった。足は少し迷ったあと、向きを変えて歩き出した。

駅でバスに乗り遅れたことにしよう。30分くらいなら、心配はかけないだろう。
ぼくの足はいつもより早くなる。大きな菓子折の紙袋がまだるっこしかった。

誰も通らない、深い草むらを分けて降りて行くと、そこは見慣れたぼくの場所だ。大きな岩が隔てた、誰も知らない空間だ。
岩と岩の隙間から川の流れが勢いよく噴き出し、段差をなぞって元の流れへと帰っていく。いくつもいくつも重なった枝が暗がりを作り、その奥にはひんやりと静まった淵がある。風が枝を揺らせば、白い雪玉のような陽のかけらがあたりに降りしきる。この幻のような一瞬を見ていたかったのだ。
姉は 何もないつまらないところだと言い、母は 淵は深くて危ないから近寄るなと言った。

靴を脱いで水に入ると、思ったほどではない冷たさが足首を伝う。足の裏を砂利が流れる。川は生きていて、すぐそばまで近づいた小魚たちを瞬時にぼくから遠ざけた。
淵のほうまで行こうとしたとき、

「どこからきたの 」

ぼくは凍りついた。

「だれ？」

質問に質問で返した。
顔をあげると、岸辺に女のひとが立っていた。
ぼくの問いはあまりに唐突で失礼だったのだろう、彼女はあっけにとられた表情でぼくを見ている。

「ごめん、そうよね。」

彼女は那智と名乗った。県外の大学生で、実家に帰ってきているのだと言った。
ぼくは川から上がり、無言で足を拭き、靴を履いた。

「このあたりの人やないよね。」

わたしは地元の人間なのでここにいる権利があるが、おまえはよそ者だ。何をしているのだ。
そう言われたような気がした。
紐を結んだら 靴は勝手に動きだし、バッグは手に握られる。ぼくは空気になり、彼女の横をすり抜けた。
急ぐので、と何ひとつ彼女の問いに答えないまま。
せっかくのひとりの時間を邪魔された苦々しさで ぼくは苛立っていた。それはいいたいことをうまく表せない自分にでもあった。

長く長く歩いて、もし駅行きのバスが来たらこのまま乗って帰ってしまおうか、とふと考えた。しかし、それでは祖母の家が心配するし、自宅に着いてからもますます面倒だ。いったいどう説明するというのだ。

立ち止まり、かなり早まっている鼓動がおさまるのを待った。落ち着こうと、深呼吸して荷物ごと腕を振り上げたときに、あることにぼくは気がついた。

菓子折の紙袋が ない。

おばあちゃんの家に着くと、ぼくはこの家の子供のように迎えいれられる。
先ほどまでの苛立ちと不安で、まだ半分くらいは無表情なのだと思うが、かえって不自然な作り笑いなどせずに済んでよかった。
おばあちゃんとおばさんが冷たいお茶やお菓子を並べてくれる。
あの菓子折はなかったことにすればいいのだろうか？ 何も期待されるほどのものではないだろうが、置いてきたとすれば、あそこだ。確かに倒れないようにと岩場に置いた記憶はある。隙をみて取りに行くしかない。

しばらく家族の話をしていると、外で犬の鳴く声がした。
「ごめんください」
女のひとの声がして、おばさんが玄関に立った。

「あら、久しぶり！帰ってたの。」

おばさんの知り合いなのだろう、甲高い声が部屋まで届く。長くなるようなら今のうちに菓子折りを取りに行きたい。
記憶の中であそこまでの道のりを、時間をたどる。どうせ誰もこないところだし、今もあの紙袋はあのまま、ぬるい風に吹かれていることだろう。ぼくは紙袋を音もなく持ち帰る。そして、何事もなかったかのように言おう。うっかり忘れていたようにだ。そういえばこれ家から預かってきまし

「佐和ちゃん！」

突然呼ばれて驚いたぼくは、まだたっぷり入ったジュースのグラスを大きく揺らした。

「ちょっとおいで！」

おばさんの声に恐る恐る廊下へ出る。
足音も立てずに玄関へ行くと、そこにはさっきのひとがいた。

あっ、と声に出しかけて押し殺したが、知らんふりもしようがない。
なぜなら、彼女はぼくの置いてきた菓子折りの紙袋を持っていたからだ。
ぼくは軽く頭を下げた。

「佐和ちゃん。これ、駅に忘れてきたでしょ。」

おばさんがぼくに言う。
駅じゃない、と目が菓子折りと彼女に訴える。なぜ、駅と？
「この袋のなかに、お姉ちゃんの成人式の写真が入ってたよ。お姉ちゃんとなっちゃん、ここでよく遊んだから見てすぐわかったって。」

青く遠い記憶のなかに、母さんがおばあちゃんに届けたいものがあるといった言葉がうっすら浮かんできた。
そうだ、そのためにぼくはここへ来たのだった。
まさかその姉の写真が菓子折りに入っていたとは知らず、いや、ぼくが聞いていなかっただけなのだろう。そしてその袋ごと、ぼくはあの場所に置いてきたのだ。

なっちゃん、とおばさんは呼んでいた。よく知ってるひとだったんだ。
ぼくは、すみません、わざわざありがとうございましたと小さな声で言った。
「知ってるひとで良かった。警察に届けても、写真とお菓子じゃどこの誰のだか調べようがないもんね。」
なっちゃんは笑ってぼくに言う。
「夏休み、ずっといるの？」
「あ、15日まで。」
「そっか、一緒だね。」

すぐそばにいると思っていたおばさんが台所から、なっちゃん、と呼ぶ。
「おばあちゃんの好きな葛餅作ったから、持っていきなさい。」
「わぁ！うれしい！おばちゃん、ありがとう！」
容器に入れた葛餅を彼女に渡し、何か野菜の入った袋を持ったおばさんが、佐和ちゃん、ちょっと重いけどなっちゃんの家まで持って行ってあげな、とぼくに差し出す。
「いいよ、私持てるから。」
「葛餅柔らかいんだよ、傾くといけないからさ。」

ぼくは靴を履いて、野菜の袋を持った。

「おばちゃん、ありがとう！」

屈託のない彼女のあとを、ぼくは歩く。
玄関を出て砂利道を進む頃には、片手に食い込む野菜の重さが、ぼくのこころの重さと妙な釣り合いを取っていた。

「どうして、駅だなんて言ったんですか。」

重いの持たせてごめんね、という彼女に、またぼくは唐突な質問をする。
午後の熱く焼けた砂利が靴の底の向こうからぼくの気持ちを押し返した。

「どうしてだろ。」
おばさんの顔を見たとき、彼女は思いつきで口から出たのだと言った。
「あの場所、なんて言ったらいいのか。」

〝佐和ちゃん…だったね。”
そう言われて、ぼくは顔が熱くなった。
「佐和ちゃんは、どうして」
彼女はそこで言葉を切った。

沈黙のあと、ぼくは言った。
「子供のころから、母さんと姉ちゃんと散歩に行ってたから。」
いつどうして行き着いたのかは覚えていない。誰も来ない秘密の場所だという認識しかぼくにもないのだ。
「今年はひとりで行ってみたくて。」

「そうかぁ。」

しばらくぼおっとしていた彼女の目が、躰をひるがえす鮎のようにキラッと光ると、
「明日の朝、また行ってみない？」
唐突に言った。

ぼくはひとりでいる時間がほしかったが、まだここには何日もいるわけだし、あの場所を知っていた“那智”というひとをもう少し知りたいとも思った。

「うん。」

彼女の家は車道の向こう側にある。重い砂利から足は解放された。車などほとんど通らない固い

アスファルトは、一瞬ぼくをもとの世界に引き戻す。
いいと言ってしまったが、いったい何を話せばいいのだろうか。気疲れするのが一番の苦手だ。
アスファルトの乾きは陽炎を呼び、荷物の重さをますます感じさせた。

先に行く彼女に、なっちゃん、とおばさんの口調で呼びそうになり、那智さん、と言い直した。
「あの、やっぱり」
「朝早いほうがいい？」
彼女は振り向いてうれしそうに言う。

うれしそうに

不思議なものを見るように、ぼくは静かにうなずいてた。

どうしてだろう　ぼくは断りたかったのに。
朝早くなんて絶対自信ないのに。
まともに話すことなんてできないのに。

それからのぼくはずっとうわの空で、いつもよりもずっと間の抜けた受け答えをしていたようだ。
のちに家に帰ってから大いに物笑いのタネにされた。

朝

夏の日の出は早く、田舎の朝も早い。
無理をして起きたつもりの僕の朝も、ここではもういろんなものが動き出している時間だった。
あわてて出かけようとするぼくの足をたっぷりの朝食が止め、靴を履くころには8時を回っていた。

那智さんとは時間の約束はしていない。だから遅れたわけではなかった。遅れたわけでもないのに気持ちに負い目があった。あのぼくの場所に誰かが先にいるというだけで気になった。
話すことも話しかけられることも、ぼくには肺の奥がキュッとなって息ができないくらい苦しいことだ。なのに、ぼくは立会人のようにあの場所にいなければならない。そう思い込んでいた。

那智さんはぼくになにを話したいのだろう。
息をひそめるように草むらのなかの足場を踏み分けると、近くでざわっと音がする。あの人がいるのかと覗くと、あわてて飛び立つ鳥の影が遠ざかっていった。
あの人の姿はどこにも見えず、岩の向こうも淵も見渡したけれど、いつものようにぼくだけだった。
もしかして、もう帰ってしまったのだろうか。そうかもしれない。
あのとき、「もっと早い時間がいい？」と聞かれたのだから。

気が抜けてしまうとそこにはいらだちが残る。馬鹿馬鹿しい、こんなに急いできたのに。Tシャツは汗ばんで、今日も暑くなりそうな気配だ。
視線を上げると勢いのある日差しがこの場所を変えて見せていた。眩しいほど乱反射する水しぶき、透明感のある淵、すべてがいつも知っている世界と違っていた。これはぼくのいないときの素顔なのか。ぼくに見せる顔は幽玄で無限で尊厳で…
気持ちのせいなのか、朝のまぶしい光のせいなのかはわからなかった。少なくとも、ぼくは落ち着けなかった。
待つか、帰るか。それが問題だ。

昨日までのぼくなら、那智さんがいないとわかった瞬間に、迷うことなく帰り始めただろう。
でも。
少し待ってみようと決めた。
時間を決めたわけでもなかったっけ。ぼくも急ぐわけでもない。もう一度、ぼくのお気に入りの場所をぐるりと眺める。
陽は少しずつ高くなり強くなり、ぼくの背中を押す。靴を脱いで、水のなかに立った。

昨日よりも冷たい流れは、一定のリズムでしぶきを跳ね、白いノイズを響かせ、大きなうねりとなってぼくを過去へと連れ戻す。

「 佐和ちゃん お姉ちゃんと手をつなぎなさい。」

どこかから母の声がする。

「淵へ行ってはだめよ。」

なぜだめなのか、聞いたことがあるような気もするが、その答えは忘れてしまった。

「お母さん、佐和がいうことをきかないの。」

不満そうな姉の声。
その直後に、水苔のついたゴロ石に足を滑らせ、ぼくはいとも簡単に水中に尻餅をつく。

「 ほらっ！」

続きは忘れてしまったが、ご想像の通りだろう。
そんなやりとりが、瀬音のなかに聞こえてくる。

佐和

そうだ。いったい何度呼ばれたことだろう。
いつもそうして、ぼくは姉にたしなめられていた。

「佐和ちゃん」

幼い時にそうしたように ゆっくり振り向くと、そこには那智さんがいた。

「ごめんね、待たせてしまって。」

草をかきわけながら降りて、乾いたゴロ石の上をジグザグに歩いてくる。
帽子の下の、影になった那智さんの笑顔。
ぼくはあいさつもできずにぼんやりとそれを見ていたようだ。

「どうしたの？怒ってる？」
怒ってない。なんて言ったらいいのかわからないだけだ。
「いえ」

那智さんは姉ちゃんのことを聞きたかったようだ。
「去年 絵留ちゃんとね、今度の夏は成人式の写真を見せあおうって約束したのよ。私はこっちで振袖予約してて。でもね、年末からひどい風邪ひいちゃってこっちに帰ってこられなくなって。」
菓子折りの紙袋に入っていた写真のことだ。
「届けてくれてありがとうございました。そんな大事なものが入ってるって知らなかった。」
「いいよぉ。私も中身を確認しようとしたら絵留ちゃんの振袖姿だったから、偶然とはいえ見せてもらえてよかったよ。」
ありがとう、とかすれた声で那智さんはお礼を言ってくれた。
姉ちゃんとはもうずっと別行動で成人式のいきさつはぼくも知らなくて、話すこともできない。
「今年のお盆休みは、なんか…母も姉も都合が悪くて。」

しばらくして那智さんはまたかすれるような声で言った。
「そうなの。」

ぷつりと切れた会話を、鳥たちの声が繕う。
ぼくもなにか話さなきゃ と記憶をたどり、そういえば昨日のここでの会話を思い出す。

「那智さん、一人暮らしなんでしょう？」
毎日だれにも邪魔されないって、どれだけ素敵なんだろう。
那智さんはうなずいて、話し始める。

私は大学へ行って初めて一人暮らしをして。
「知らない」ってことがこんなに心地よく感じるなんて思わなかった。

初めて来た街で
知らない香りの風に吹かれ
違う表情で笑って
見慣れない服を買う

初めてひとりで…って言っても寮生活だけどね。時間も規則もそれなりに厳しいけど、ここと違う、余計なことを話さなくていいし聞かなくていいし、好きなように時間も使える。なによりも自分のままでいられて気楽なの。
困ったのは、病気になったとき。熱があるのにお医者さんへいくの、一人じゃ大変。おかゆを作ってくれる人もいない。いいことばかりじゃないよね。
絵留ちゃんは家から通ってるんだっけ。ああ、学校が近いの。変わってない？･･･そうかぁ。

すこし、扉が開く。
ぼくは家族のこととか、学校のこととか、ありきたりのことをしばらく話した。
那智さんは、ぼくの少ない言葉からうまく話をつないでくれて、ぼくにしては長いことしゃべっていたような気がする。

真上から差す太陽はますます強くなり、ついに耐えられなくなってぼくたちは帰ることにした。

こころの海

ぼくはものごころついた頃から、ひとに優しくされるのが怖かった。
笑顔の裏になにを隠してるのか、なにかを見せまいとする頑なな扉をいつも感じていて、笑顔で近寄る大人たちを遠ざけていた。

幼稚園に入っても、さっきまで優しかった子が急に怒り出したりするのについていけず、周りの音も聞こえないほど本の世界に入り込んでいるときにいきなり先生の都合で引きずり出されお遊戯をさせられるのにも閉口した。この中途半端なテンションをどう楽しめというのか。
大人びた子供と言われたり、子供らしさがないと言われたりしたけれど、苦くも酸っぱくもない顔してやり過ごした。
別にぼくが素晴らしい特別な人間だとか、思い上がった考えはない。いたって自然体のつもりなのだ。でも子供らしさって努力して作るものでもないわけで。
いわれたことちゃんとしてるじゃん。それ以上にぼくを追及しないで。
あれもだめこれもだめああしろこうしろと言われているうちに、ぼくはすっかり疲れてしまった。

もう子供はいいから、早く大人になりたかった。
子供らしい子供たちのなかにいることが辛かった。
それは小学校へ行っても中学校でも同じだった。

部活も受験もどうでもよくて、でもそれは許されなくて、一生懸命になれることなど学校にはこれっぽっちもなくて、中学生で人生詰んだかなと思ってた。

流れに浮かんで、流れるままに浅く息を続けることを、いつしか憶えた。

負けず触らず逆らわず、だ。
どうせこんなの、いっときのことだよ。

ぼくはこころのなかに海を作った。
深い深い誰も入ることのできない静かな世界。
なにも言わず、なにも聞かない。
落ちていく、

ゆっくりと。

水圧のなかで息もせず
鼓動はゆっくりと速度を落としていく
体温は水の温度とおなじになり
ついにぼくは海の一部になるのだ
海は…素知らぬ顔で
水面にひとつの影も落とさず
ざわめきの奥でぼくを眠らせていた

その世界に入ることで、ぼくはすこしの現実の時間を我慢できるようになった。

あの場所から帰って、しばらく涼しい部屋のなかで寝転がって考えていた。
あまり知らない人と話すのは得意じゃない。けど、那智さんと話すのは苦痛ではなかった。こころの奥にあるものを、言わなくても間違いなく読み取ってくれるような安心感があった。
なんだろう。
なんだかとても不思議なのだ。

水　色

午後からしばらく課題をこなすと、自分の部屋にいるときのように昼間ゴロゴロしているわけにもいかず、柱にもたれてぼんやり短編小説に目を落とす。現実にありえないようなおとぎ話の水溶液が重苦しくて、深呼吸でもするように木の窓枠の向こうの空を見上げた。
高く高く積み上がった真っ白なかき氷のそのまた上に乗っかるように、雲はいつまでも湧き上がっていた。

飽きずに見ていると、台所で食器の音がしはじめる。
ふと一人になりたくなり、あの場所へと向かう。那智さんのいない、ぼくだけの場所にこころを満たされたかった。

熱気の残る草むらを荒くかき分け、サンダルのまま水に入る。水しぶきをふくらはぎにたっぷり浴びて、淵の方へと近づいていった。
そこには腰かけるのにちょうどいい石があるのだ。そこで空想に浸ろうと思っていた。

淵に沿って洞窟のような岩壁が外の世界を遮る。石の座り心地を確かめて、ぼくは目を閉じた。
せせらぎの残響が透明な五線になり遠く遠く深い世界へとぼくを誘う。ぼくの魂は身体から離れ、そのあとを追いながら消えていく。
緑の蔭の神様がいるとしたら、きっとこの場所がお気に入りになられるだろう。音の響きはいくつもの輪をあめんぼの足あとのように描き、いつまでも和音を奏でていた。

と、そのなかに、意識のようなものを感じた。

耳をすますと、誰かの話し声だ。
ぼくは慌てて見回した。

白い人影が動くのが見えた。しかも二人。近づいてくる。

ぼくに気づくだろうか。ひそめた全身に心臓の鼓動が共鳴する。誰だろう、話に夢中でこちらに気づかなければいいが。

電波の悪い通話のように、せせらぎに埋もれて声が聞こえる。

声はますます近づいてくる。ぼくは背中を岩に預けて息を潜めた。

「昔イジイジと悩んでた時も、『バカヤロー！くだらんこと悩んでるヒマがあったら人のために働いて、胸張って生きてけー！』ってすごく叱られたの。でも本当はとても優しくて、ずっとずっと気にしてくれていて、私が消えてなくなりたいって言った時も…朝まで話をしてくれて。」

その声は。

「大好きなのに…毎年夏にしか会えないのって寂しいよ。」

せせらぎに木の葉が舞い下り、同心円の渦を描いて消えてゆく。

「好きだって思うのは自由だけどさ、ほんとのほんとにそうなのか？」
「わかんない、好きすぎてだんだんわからなくなってくるよ。どうすればいいのか。」

ふうん。
なんだかこじれてるっぽい？
スキとかキライとか、ひとりで生きているぼくには関係のない話だ。

「でも、成人式の写真を偶然見ちゃったのよ。神様がなにか伝えてくれたのかもって、頭の中が真っ白になって、足が震えちゃってしばらく動けなくて。」

え…？

「絵留ちゃん すごくきれいなんだもん、ああ私も一緒に振袖着たかったなあって真剣に悲しくなって。」

姉ちゃんのこと？
え？え？さっき大好きって言わなかった？？

「そんな悩まなくっても、成人式じゃなくても振袖ならいつでも着られるだろ？」

そうじゃなくて、と那智さんは答える。
「あなたにはわかんないよ。私、普通の女の子でいたかった。」

普通って、普通だと思うけど？ 那智さん、なに言っちゃってるの？

「普通に友達でいられればそれでいいのに、どうして私、女の子を好きになっちゃうんだろう。」

那智さんと、たぶん同じくらいの年の男子。

その二人と わずかな空間を隔てたところにいるぼく。

息をするのも忘れるくらい…

あいだを流れる水流と、それを堰き留める大きな岩だけが時の流れを司っていた。
風は松の枝を時折揺らして、きっかけを作ろうとする。

それで姉ちゃん、今年は来ないつもりだったんだろうか。
こんな話になってるとは思わなかった。
ぼくが初めにここに来なければ、あの紙袋をここに忘れなければ、那智さんと会うこともなく、那智さんがあの写真を見ることもなく、今聞いたことも知らないままだったわけか。

家へ帰ったら、あの写真を那智さんに見せたって姉ちゃんに言うべきか、それとも。
荒ぶる姉ちゃんの姿が目に浮かぶ。
「佐和はひとりでお使いもできないんだから！」って叱られそうだ。

・・・いや、そんなことよりも。

聞こえてきた言葉の数々を反芻しているうちにあたりは色を失い、風は止まった。
そっと顔を上げると、もうあの二人はいなかった。
水面には音もなく白い妖精がふわりふわりと現れはじめる。
かげろうの羽化だ。この時を待って、隠れていた魚たちが集まってくる。
命をかけて変身し、水上でほんの短い時を謳歌して、彼らは息絶えるのだ。

ほんの数時間・・・
あれこれ悩む暇もないほど凝縮した世界なんだろうな。
きっと人間は、大人になってからが長すぎるから大変なんだ。その長丁場を全面飾らなきゃって思うから大変なんだ。失敗したらもとに戻れないから大変なんだ。
ひときわ大きな魚がライズする。水しぶきと大きな波紋に、白い妖精は一時姿を消す。
失敗したらもとに戻れないのは、彼らも同じだった。

また風が吹き始めた。

すっかり夕暮れた道を、ぼくは足早に戻った。

「海へ行かない？」

次の朝、さすがにあの場所へ行く気がなく、ご飯のあと作文でも片付けようと思っていたら那智さんが訪ねてきた。

「え、海？」

ぼくは海で泳ぐとか波打ち際でキャッキャして遊ぶというのはまったく苦手で、一緒に行っても那智さんがつまんないだろうと思う。
しかも海までは歩いて行ける距離ではなかったはずだ。

那智さんは、駅前の夏祭りのイベントで、海沿いの旅館の食事券が当たったのだとぼくに紙片を手渡す。
「ほら、2人分。ね、ちょうどいいでしょ。」
まだ不審な顔をしていたのだろう、お父さんの車借りたから大丈夫と那智さんは言う。

そこへおばさんが通りかかる。
「おばちゃん、今日は佐和ちゃんと海へ行ってくるわ。」
「そうなの、良かったねえ。」
那智さんはぼくに、すぐに出かけられるかと聞く。
水着も何もないと答えると、那智さんは笑った。
「いいよいいよ、私も持ってない。」

那智さんのお父さんの車は、少し古い型の白いセダンだ。
別にぼくじゃなくても、昨日あの場所で話してたひとと行けばよかったのに。そんなこと言えないけど。
「なんかさあ、海へ行くっていうだけでうれしくなるじゃない？」
うん、と答えておいた。

前は家族で旅行へ出かけると、海とみればどんなところでも水に入っていった。
あの頃はぼくもはしゃいでいたんだろうか？

自分のことなど憶えがない。
ヘンな海藻が流れてきたり、温かい水と冷たい水を足の裏で感じたり、遠くの遠くまで泳いで行った誰かの小さな黒い頭をすごいなあと思って見ていたり。
砂利っぽい砂浜だとすぐに水が深く冷たくなり、細かい砂浜だとどこまでもさらさらと波に翻弄される。
そうだ、海へは翻弄されに行くのかもしれない。

「那智さんは泳ぐの？」
那智さんは恥ずかしそうに言った。
「浮き輪と友達。」
ぼくと同じだ、と言おうとしてやめた。
「海へ行くのもずいぶん前に家族で行ったきり。車ならたいして遠くないけど、バスで行くと乗り継ぎが悪いの。だから友達同士なら市民プールへ行くかな。」
海への道を知っている車は、ひまわりのように太陽に向かう。

旅館は海水浴場のすぐそばだった。食事にはまだ時間があったので、車を停めて海の方へ歩いた。
旅館の古い建物の影の細い通路を下ると、青と碧の混ざりあった絵の具をバケツで振りまいたような水平線があらわれた。
「きれいねえ！」
那智さんは走り出そうとし、ぼくは那智さんの腕を掴んだ。
「危ないよ。」
通路と海岸の間には車道があったのだ。
ぼくたちの前を赤いロードバイクが通り過ぎて行った。

「佐和ちゃん 冷静だね。私ちっとも気が付かなかった。」
車道を渡り切って眩しい砂浜に足を踏み入れた時、ぼくは那智さんの腕をまだ掴んでいたことに気づいてあわてて手を離した。

いくつかの売店をくぐり抜けて、よく冷えた飲み物を買う。
やはり親子連れの多い海岸はにぎやかで、ぼくと那智さんの声を何度か消す。
「せっかく来たから水際まで行こうよ！」

サンダルの足を熱い砂にとられながらの道は長かった。
やっと波打ち際までくると、水の染みた砂は固く体重を受け止める。
なんだかわからない貝殻と、やはりなんだかわからない海藻と木片とが白い泡と一緒に行き来しているのは変わらない光景だった。
「引き潮やね。」
こういう日は午後から潮が満ちてきて、砂浜が少し狭くなるのだと那智さんは教えてくれた。

「佐和ちゃんは泳げるんだっけ？」
首を横に振る。
「息継ぎが下手だから25mプールが泳ぎ切れない。」
「私は距離は泳げないけど、潜るのだけは得意なの。陸にいるときよりも水の中のほうが息が続くような気がする。イルカの生まれ変わりかもね。」
「イルカよりも人魚だったかも。」
肩を揺らして那智さんは笑いだした。
「そんなきれいなものじゃないよ。」
ぼくより背が高くて手足が長いから、人魚のイメージは嘘じゃない。
足元に波が来た。
サンダルと足を埋めるように細かい砂を置いて、波は引いていく。

「潜っていくとね、音も光も変わってしまう。その世界は好きなんだけど。」
ふうっとため息をいれて、那智さんから笑顔が消える。
「深く深く潜ると、わかんなくなってくるのよ、だんだん」

深く潜る…
ぼくの、あの感覚が不意に訪れる。
浮かんでいるのか沈んでいるのかわからない、青い青い空間。
「それ、わかる気がする。」
ぼくの口から反射的にその言葉は出た。

「えっ？」

「あ」

話したところであの世界はわからないだろう。だってあれは誰にも知られない、ぼくが作り出した世界なのだから。
ぼくはそこで口を閉ざした。

「ねえ、その話聞きたい。」

飲み物も底をつき、ぼくたちは旅館へ戻ることにした。

那智さんの当てたチケットは想像より高価なものだったようだ。
旅館の部屋は静かで、出される料理は初めて見るものも多く美味しかったのだが、ぼくたちはちょっと場違いな雰囲気でもあった。
ひと通りのお皿が並べられたころ、那智さんが待ちかねたように口を開いた。

「ねえ、さっきの話。佐和ちゃんの思ってるのはどういうこと？」

なんて話したらいいのかずいぶん迷った。でも那智さんならわかってくれそうな気がして、話すことに決めた。
子供の頃のこと、学校のこと、家族のこと。そして青い青い部屋のこと。
那智さんはぼくの脈絡のない、バラッバラな話をじっと聞いてくれていた。

「ウンザリするほどイヤなことが続いても、自分の部屋にいる時間があれば もう何が来ても大丈夫だって。それがわかってからはすごく落ち着いたしイヤなことも楽しくなってきた。」
「そうなんだ。自分に戻れる場所ができてよかったね。」
「時間が過ぎちゃえばなんでもないんだなあって。姉ちゃんもいろいろ言ってくれたけど、でもあれは姉ちゃんの生き方なんだから自分とは違うのもわかってきたし。」
「それ、絵留ちゃんに話したことある？」
「きっと聞かないよ。『ウザッ‼　』って、ひとこと言われるくらいかな。」
「そうだよねぇ。」
やっぱり絵留ちゃん変わらないよね、と笑いながら那智さんは冷たいお茶に手を伸ばす。

「那智さん、那智さんは姉ちゃんと仲がいいんでしょう？」
静かにグラスを置いて、那智さんは返事をせず黙っていた。

「こっちで会うとどんな話をしてたの？」

「学校のこととか…ね。」
しばらくして思い出したように話し始める。
「佐和ちゃんと行った、あの場所でいつも話してた。」
「あそこで？」
那智さんの口元が緩む。
「…そうそう。絵留ちゃんの好きな子の話とか、聞いたなあ。」
「えっ？姉ちゃん の？ウソっ！」

「ほんとー。でもどんな結末になったかは知らないよ。」
「いつ？」
「去年…かな？」

姉ちゃんの好きな子って…？

「家では言わない？」
「言わないどころか！」
男子にでも てめーこのヤローふざけんなとか言ってる姿しか見たことないよ。

わかる、と小さな声で那智さんは言って笑った。
次の曇り硝子のお皿に手をのばしながら、佐和ちゃんは？と聞く。

「え？」

まだ早いかな？、と那智さんは海老の殻をむきはじめた。
「佐和ちゃん、かわいいから。」

息が止まった。
やめてよ、かわいいなんていわれたの初めてだ。ほら箸が震えだした。きっとこの海老よりもぼくは真っ赤になってるだろう。
ぼくは頭のなかがとっちらかって、なんて言えばいいのか言葉に詰まった。
そしてやっと
「那智さん。那智さんは…姉ちゃんのことどう思ってるの？」

海老の殻をむいていた那智さんの手が止まる。そしてぼくを見つめる。
なんでこんなときに核心に触れる？
ああ、これだからぼくは

「好きだよ。」

しばらくしてぼくの顔は海老を通り越してラディッシュみたいな赤い顔になったに違いない。本当だったんだ、あの場所で話していたことは！

「厳しいことも言うから苦手なときもあったけどね、学校で困ったことがあって…絵留ちゃん

はずっと励まして助けてくれたよ。性格はあの通りだけど、ほんとは優しいよね。そういう人でしょ？」
だから大好きなの、とぼくの顔を見つめる那智さん。

うん

うつむいたラディッシュの間抜けな顔のままで、ぼくはそう答えるしかなかった。

「佐和ちゃん　私さあ。絵留ちゃんとまたお話しいたいなぁ。」
那智さんはぼんやりした表情で、ぼくに言う。

「那智さんからは連絡しないの？」
「うん」

なんとなく気まずい沈黙。

「あっ、だったら帰ってから姉ちゃんに聞いてみようか？」
しまった、思ってもみないことを。

「いいよいいよ、絵留ちゃんも忙しいだろうし、私もあっちに戻っちゃうし。」
「でも。」

「また次の夏には会えるさ。」
那智さん、無理めの笑顔になった。

「うん。そうだよね。」
少しの不安と少しの安堵。その空気をかき消すように、

「ねえ、私さ、大学でチアリーディングやってるの！」
「え？チアリー…なにそれ？」

那智さんは大学の中でのことを楽しそうに教えてくれた。
最初はなにもわからなかったのに人が足りないからと無理やりサークルに入れられて、大きな大会で賞をもらったこと。そのあと内部分裂で解散しそうになったのを、那智さんが一人一人説得してまた次の大会に出られたこと。
人前に出るなんて今のぼくには考えられなくて、まるで映画の一場面のような風景が胸に浮かんでいた。

食事が終わると、粗めの氷の上にキラキラした色とりどりの寒天と果物が散りばめられた切り子細工の器が出される。
ガラス細工の隙間から入る光が氷と寒天を乱反射させて、食べ物とは思えない空間を作り上げている。
姉ちゃんは那智さんと、もう会わないつもりなのかな。

ぼくは 那智さんと姉ちゃんをもう一度会わせてあげたい。気まずいままなのかどうか知らないけど、「好き」にもいろんな形があると思う。
というより、那智さんは優しいよ。ずっと話していたいよ。
こんなひとといられたら、ぼくはあの青い部屋から抜け出せるのかもしれない。
うちへ来て姉ちゃんと入れ替わればいいのに。
話をしながらぼくはずっとそう思ってた。

持ってきた課題もようやく終わりが見え、帰る前の日は雨になった。
もう一度あの場所へ行きたかったが、午後から不安定で荒れるかもと天気予報で言ってたので、今日はあきらめよう。
ここへ来てから、家で想像していたほどあの場所に惹かれなくなった気がする。
那智さんがあの場所にいたから？
自分だけの場所ではないことがわかったから？
それよりも…
いまは家に帰ってあの青い部屋に入ることすら、そんなに望んでいないのだ。
いつもなら、どこかへ出かけてもかたつむりのように早く家に帰りたくて帰りたくて仕方なかったのに。

雲が増えてきた窓に目をやる。ここの家の少し色褪せたカーテンは、薄いオレンジ色に流線の織り模様だ。普通だな、と思う。
そうだ、これが普通のセンスなんだ。きっとどこの家のカーテンも柔らかい色なんだよなぁ。

真っ青なカーテンを選ぶなんて、変わってるんだよなぁ。

すごく離れたところから自分を見下ろしているぼく。
自分の青い部屋の中に同化している僕はとても小さい時のままで、なにか人形のようなものを胸に抱いている。よく見えないがとても懐かしいもののような気がする。幼い頃に誰かからもらったのだろう、まるで自分の抜け殻のように持ち歩いていた憶えもある。
いたずらで姉ちゃんにもぎ取られて大泣きしたりしたんだろうな。それとも姉ちゃんのお古だったのかもしれない。
うさぎだか犬だかたぶん長い耳を持った薄茶色のそれは、ぼくの腕の中で大きな伸びをする。
『ああ、この部屋にも飽きちゃったなあ。この部屋はぼくには狭すぎる。もっと違う場所で、違うおやつを食べたいなあ。』

そうか、きみにも飽きることがあるんだね。
今のぼくにはわかる。
きみは自由にすればいい。

小さいぼくが人形を持つ手を緩めると、その人形はするりと部屋の隅へ飛んで行き、魔法のトンネルでもあるかのようにいなくなった。

少しの哀しみと少しの自由を感じた。哀しいはずなのに苦しさを感じないのは初めてだった。
ガクンと衝撃があって、もうひとりのぼくを載せた青い青い部屋がエレベーターのように沈みはじめる。

待って！と手を伸ばすけれど、足元もおぼつかないぼくの腕力ではとても抵抗できそうにない。
部屋の中の小さなぼくが、ぼくを見上げている。深い海の底に引きずりこまれるように部屋は加速度を増して沈んでゆく。
ぼくの思い出とぼくの居場所。折れた色鉛筆も爪先ほどの消しゴムも、大きなスターシップのプラモデルも大人になっても手放さないと決めていたシックなイラストも、いままでのコレクションもこれからの夢もなにもかも、ぼくを形作っていたすべてのものたちを中に積んだまま。
潜水艦は遠く遠く下となり、圧縮された塊となり、いつしか点となって見えなくなった。

ぼくはまだ宙に浮いたままだ。
小さなぼくと同じように視線を上にやり、だれかのまなざしを探している。誰のせいでもなく壊れたおもちゃは、やはりぼくのせいになるのだろうか。
こころの壁から剥離したひりひりした痛みを感じながらも、さきいまで青い部屋のあった海の片隅にはうすぼんやりと陽が射しているのがわかる。
そこへいけるだろうか。
そこへいけば。
なにかが変わるのだろうか。

那智さん、明日帰ると言ってたっけ。
もう一度 話をしたかった。
この気持ちを忘れてしまう前に。

「那智は、出かけてるよ。」

那智さんのお母さんが教えてくれた。
地元の友達と会ったりしてるかな。ぼくと遊んでばかりもいられないだろうな。

「佐和ちゃん、ありがとうねえ。」

帰ろうとすると、那智さんのお母さんが言った。
「いつもは絵留ちゃんが遊んでくれるけど、今年は佐和ちゃんが来てくれて楽しそうだったよ。」
あの子、普段はあまりしゃべらないから、と静かに微笑む。

『あの子』が誰のことなのかわからず、頭がクラクラして黙っていた。
しゃべらない？誰が？
那智さんのことだと把握するまで、どれだけ時間がたっただろう。

「え」

「佐和ちゃんがいたから那智は海へも行けたんだよ。私にもいろいろ話してくれてねえ。」

あんなに優しい那智さんが、お母さんと話さないなんて信じられなかった。うちの姉ちゃんよりよっぽど大人でしっかりしてるのに。
でも那智さんのお母さんの、なんとなくほっとしたような表情を見ていたら、それは本当なんだなあって感じられてきた。

ぼくも楽しかったですとかなんとか、海へ連れて行ってもらってありがとうございましたとか、後で思えばいうことはいっぱいあったはずなのに、ぼくは はぁ…とかわかったようなわからないような気のない返事をしたきりで歩き出してしまった。

もうどれだけ気が利かないんだろう。

ポツポツ降り出した大粒の雨はみるみるうちに道を彩り、ぼくの髪を濡らし肩を打ち、家に入るのがすっかりいやになったぼくの脚を雨の槍で封じてしまった。

帰るべき青い部屋ももう失くしてしまっていたぼくは、その居心地の良さに雨がやむまでそこにいようと決めた。
決めたといえばかっこいいが、ただどこにも行き場がなかっただけだ。
山が近いのでなんの前触れもなく大音響で雷が鳴りひびく。光と音がすぐ頭上に感じられるほど、近い。
そんなもの怖くない。
ぼくをめがけて稲妻が落ちればいいのだ。

それでぼくなど消し飛んでしまえばいいのだ。
今なら大泣きしたって神さまにもわからないのに、こんなときに限ってそんな気分にはならないものだ。

雨脚は強く顔を叩き、うっかり息を吸うと溺れそうだった。
青い部屋にいたころは、どんな水の中でもぼくは溺れることなどなかった。
なのにどうだ。少し外に出ただけで、雨に当たっただけで、もう負けそうになっている。
木や草は静かに耐えているというのに、どれだけぼくは弱いのだろう。
大泣きしていたかのように顔をこするが、雨粒は次から次へとぼくの瞼を濡らし、止むことがない。

音のない稲妻が低い位置に光ったように見えた。
急に雨の音が変わる。
槍のような雨がぼくの周りからさっと消えた。

「どうしたの？」
傘の中の声は那智さんだった。
「乗って！」

ぼくの真後ろには、海へ連れて行ってもらった白い車がライトをつけたまま停まっていた。
那智さんは先に運転席に座ると、後ろの座席のクッションを2つ取って助手席に置き、ぼくに座るように言った。

「こんな雨の中… なにかあったの？」
「那智さんに話したいことがあって」
「ああそうだったの。ごめんね、今日は高校の頃のバイト先に行ってたの。」
急に降ってきたねとぼくにタオルを差し出す那智さんも、ぼくのせいで濡れてしまっていた。車は庭に停まり、ぼくたちはそのなかで雨宿りをした。

「もう 明日は帰るのね。」
その声も、車の屋根を突き刺す勢いの雨のせいで、遠く聞こえる。

「今年は佐和ちゃんと一緒にいられてよかったよ。 あの場所はね、本当は小さいころ私だけか知

ってるところだったの。絵留ちゃんに教えたのも、私。佐和ちゃんが好きになってくれて良かったなあ。」

ぼくもあそこには小さいころからの思い出が詰まっている。あの場所を知っているからこそ、今年はひとりでここに来たのだ。

「誰にも言えないようなことをあの場所に置いてくるの。そうするとね、とっても落ち着くの。わかる？すうっと吸いこまれて消えちゃう感じ。」

あの場所は那智さんにとっての青い部屋なんだ。だからぼくにも心地いいんだ。

「気持ちの中に出てきたもの、話したって本当は誰にもわかんない。それはね、親にも兄弟にも、大好きな友達にもわかんないことなの。説明するのも疲れるし、心配をかけるのも嫌だし、ここへ来て流してしまえばそれで済んじゃう。それが一番いいの。」

でも姉ちゃんには話したんでしょう？そう聞きたかったけど、あのとき盗み聞きしてたのがバレちゃうし、聞くわけにもいかなかった。

「佐和ちゃんはいいな。絵留ちゃんがいつもそばにいる。」
冗談じゃない！そんな話、姉ちゃんには通じないよ。通じないからぼくは…
「絵留ちゃんとなら、ずーっと一緒にいられそう。」
い、一緒にって… やっぱりそういうこと⁉
「佐和ちゃん？顔が赤いけど、もしかして風邪ひいたんじゃない？」
そうじゃないよ、那智さん！ て、天然すぎるよ。

「私のことばかりしゃべっちゃった。佐和ちゃん、話したいことってなんだった？」

ぼくは今日感じたことを那智さんに全部話した。今までの自分が変だったと思えたこと、あの部屋にいた小さなぼくのこと、こころの中の青い部屋を失ったことも。いつもの通り話す順番もメチャクチャだったんだろうけど。

「那智さん、ぼく青い部屋はもういらない。あの部屋がなくても大丈夫な気がする！」

那智さんはなにかを見つけた猫のような表情で僕の顔を見た。

「えっ」

雨で聞こえにくいのかもしれない。

「ぼくはもうあの部屋には帰らない！」

なにか違和感のある間がぼくたちを包んだ。

「え？」

あれ… なにか　ヘン？？

おばさんとおばあちゃんには、お土産をずっしり持たされた。
朝早く大学のある街に帰っていった那智さんの代わりに、お母さんがバス停まで来てくれて、小さな紙袋を手渡された。
「またおいでね。那智もここで会えるのを楽しみにしてるって。」
今度こそ お世話になりました、ありがとうございましたときちんとお礼を言って、ぼくはバスに乗り込んだ。
バスはすぐに動き出し、見慣れた気分の田んぼの中の道をすぐに色褪せたものに変えてしまった。

那智さんとゆっくり話せてよかったなという思いの裏側で、昨日車の中でなにをあんなに驚いていたのだろうという疑問がぼくの頭のなかでくすぶってはいた。でももうひとつ、もっと強い気持ちが芽生えていた。

ぼくは青い部屋を出よう。
家出とかそういうのじゃなくて、あの部屋を違う色に変えよう。
いきなりオレンジやピンクには変えられないけど、少しずつ優しい色に変えていこう。
来た時と一緒のバスで一緒の道。
なのにこんな気分になるとは思ってなかった。ぼくのなかで何が変わったのだろう。

読み切れなかった感想文用の本が膝から滑り落ちようとした。
あわてて受け止め、もうぼくにはこの本さえ必要のないものだと感じた。
ぼくの本棚にあるいくつかの本のなかから、今までは読む気もなかったジャンルを思い起こす。
つまらないと切り捨てていた日常とや飽きるほどのやりとりも、きっと新鮮な気分で受け止められそうな気がするのだ。
ひとりで来てよかった。
家族で来ていたら、ぼくは那智さんとは会わず、那智さんもぼくをしらないままだっただろう。
いや、ひとりであっても、あの場所で写真を忘れてきていなければ。

バスを降り、電車の切符を買うために路線図を見上げる。
那智さんは反対方向の切符を買ったんだろうな。
ふと昨日の那智さんの驚いた顔が思い出された。

いったいなんだったんだろう？
何にそんなにびっくりしたんだろう？

「え？バッカじゃね？佐和って」

やっぱりそこから始まった…
ぼくはひと通り話すと、窓の外のベランダの手すりに寄ってきた小鳥たちに目をやる。

母さん、まだひとりでお使いもできないわ、この子。あっぶねー、私の成人式の写真、河原に置いてきたって！
で、なに？那智に会ったの？
あ、那智が届けてくれたのか。よかったよ那智で。町中に広報でこんな真夏に振袖写真がって拡散されるところだったよ。

はあ？那智が
私を…好きだって？誰に言ってたの？

ああー、それな！
チアとかやってるとウザいのがいっぱいくるから。そうやって言い逃れしろって私が教えたの。
あの子さ、はっきりしないじゃん。あとでいろいろ大変なんだよね。

小さい頃うちにあったぬいぐるみ？耳が長い？
あんたアトピーだったからもふもふのぬいぐるみはないわー。
あんたがずっと持ってたっていえば…カネゴンの人形よ。茶色いし。
あの目玉を耳と間違えてんじゃないの？

そうそう、そういえばさ、あんた、今みたいにあっちで "ぼく" とか言ってない？
みんなびっくりするから言っちゃダメだよ。一応女の子なんだからさ。

え…？
言ったかも!?

え!?　那智びっくりしてたぁ？
ウソっ！!

いやー、もうっ、しんじらんなーい！
母さん母さん！この子の教育間違ってるよ。

けたたましい姉ちゃんの笑い声のなか、あんたに言われたくないわよと向こうでスイカを切る母さんの声が聞こえる。

ぼんやりぼやける視界の中で、小鳥たちは蹴散らされるようにどこかへ飛び立っていった。
ぼくはぼくの居場所に戻る。
ドアの向こうは音のない、静かな静かないつもの青い世界だ。
ベッドに横たわり、静かに静かに深呼吸する。

やっぱりここがいい。 ここを変えるなんて、きっとあれは気の迷いだったんだよ。
那智さん、もう一度会って聞きたい。
本当に 那智さんは姉ちゃんのこと好きなの？
あの姉ちゃんのどこが優しいの…
I hate you!って言ってやりたいよ。

ぼくにはまだこの部屋が必要なようだ。
残り少ない夏の日を、ぼくはこの青い部屋から一歩も出ずに過ごそう。
冷凍庫のなかのチョコレートのように、深く深く冷たい眠りにつこう。

この夏の思い出とともに。

海とチョコレート

http://p.booklog.jp/book/88412
2015.10.15 発行

著者：黒野　ている
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/naomur/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/88412

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88412

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ